

荻野吟子の生涯

人その友の為に己の命をすつる

之より大いなる愛はなし

(ヨハネ伝第一五章十三節)



誕生

吟子は嘉永4年（1851）3月3日、幡羅郡俵瀬村（現熊谷市）の名主、荻野綾三郎・嘉与おぎのあやさぶろう かよの五女「ぎん」として生まれた。

俵瀬村は、江戸時代から水上交通が発達し、富裕な家も多く、荻野家も長屋門を構えた豪壮な家であった。



家の長屋門（群馬県千代田町光恩寺へ移築された）



明治当時の周辺地

学問への導き

吟子の父は、我が子や村内の青年の教育のために、当時妻りょうぎじゆく沼の両宜塾で教えていた寺門静軒てらかどせいけんを、自宅に迎えて講義をきかせた。吟子は皆の傍らで熱心にきいていたという。

両宜塾は慶応3年（1867）に静軒が去ると、松本萬年まつもとばんねんが師を務めた。吟子はここで漢学を修めた。また、その頃、萬年の長女である荻江おぎえと親交を結んだ。

寺門静軒（てらかどせいけん）

江戸後期の儒学者。水戸家公募の士官に失敗し、生活の糧を得るため、『江戸繁昌記』執筆、大あたりした。しかしこの本が幕府出版取り締まりにふれ、江戸追放の処分を受け、諸国を転々とするうちに妻沼に招かれ、両宜塾を開設、吟子の才能が開眼された。吟子の最初の夫、稲村貫一郎もここで学んでいる。



松本萬年（まつもとばんねん）

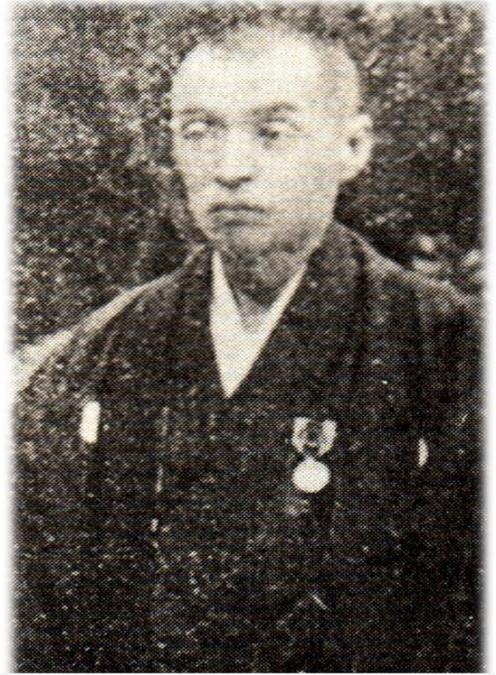
幕末の漢文学者。秩父出身。医学を学んだ後、江戸に出て寺門静軒に師事、漢学を学ぶ。帰郷して医学の傍ら子弟を教育する。「両宜塾」を継承。ここで後に日本の女医第一号となった吟子や第二号の生沢クノを教育。その後、寺門静軒の創立した東京師範学校で教鞭を執り、女子教育にあたる。

松本荻江（まつもおぎえ）

萬年の長女として現秩父市に生まれる。吟子より6歳年長で、吟子の良き相談相手であった。19歳で結婚し男児をもうけたが7歳で早逝したため、それを機に離婚し、父のもとに帰った。父萬年が埼玉県妻沼村に学舎を開くと、荻江はそこで漢学を学ぶ。門下生に荻野吟子がいて親交を深めた。後に東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）創立に関わり、吟子に入学を薦めた。

最初の結婚（18歳）

吟子の両親は娘たちの結婚を考え、姉の友子を熊谷の神官の野口家に嫁がせて間もなく、慶応4年（1868）、吟子を上川上村（現熊谷市上川上）の名主稲村家の長男貫一郎に嫁がせた。（右写真）



稲村貫一郎（いなむらかんいちろう）

稲村家は古河藩の飛地であるこの辺りの支配を任せ、苗字帯刀を許されるほどの、北埼玉有数の豪農であった。夫貫一郎は、少年の頃、古河藩に遊学し、また寺門静軒の両宜塾でも学んだ青年であった。明治8（1875）に結成された

しちめいしゃ

民権結社『七名社』の構成メンバーとなる人物であり、郷土への貢献も重ねた情熱ある若人であった。

稲村家の敷地には古河藩士を父に持つ当時の日本を代表する画家・奥原晴湖（右写真）が寓居を構え、画道に勤しんでいた。この晴湖との出会いが、吟子のその後の人生に大きな影響を与えたと言われている。吟子は晴湖の自立した生き方を尊敬し、後に女医への決意などを伝え、彼女に激励され、上京後の間借り先の世話などもしてもらった。



奥原晴湖（おくはらせいこ）